

「感謝記念 昭和二十三年四月 捜真女学校 贈 関東学院」



この時計は総務課で保管されていたが、金沢八景キャンパスの1号館の完成に伴う昨年暮の大掛かりな事務所移転を機に学院史資料室に移管された。

時計の直径は約40cm、文字盤のガラスは開閉可能。「6」の下部の木枠に小さい扉があり、中に振り子が納められている。文字盤には「MADE BY NIPPON TOKEI DENKI K.K. SEKI JAPAN」の記載がある。写真右は時計の裏面である。

時計寄贈に関する記録文書は現在ないが、関東学院史と捜真女学校史（『捜真女学校90年史』）から鑑みると、校舎借用の感謝の品として贈られたものと推定される。

捜真女学校は1945（昭和20）年5月29日の横浜大空襲で校舎を失い、南区三春台の関東学院中学部校舎を借用して授業を継続した。その後、1947（昭和22）年から具体的に神奈川区中丸校地の復興計画が立てられ、1948（昭和23）年4月10日ようやく一棟ができあがり、三春台からの移転作業、校具等の整理、大掃除を経て、同年5月4日から新校舎で授業が再開された。その間の約3年間、捜真女学校の生徒は、関東学院の生徒と共に三春台キャンパスで学校生活を送ったことになる。——大まかではあるが、感謝記念として贈られた時計の時代背景である。

資料・情報提供のお願い

学院史資料室は学院に関する資料の収集をしています。各学校、各部署等で発行されました刊行物は一部、学院史資料室にご寄贈くださいますようお願いいたします。また、各所で作成されたのち、既に保存期間を超えたか、不要になっている過去の書類、機器・備品、写真などにつきましても、情報を提供していただけますようお願いいたします。（瀬沼・菊池・岡崎）

編集後記

『学院史資料室ニュース・レター（No.4）』いかがでしたか。本号では、閉校した女子短期大学および定時制高等学校の特集を組んでみました。学校は社会のニーズに応じて変革されるべきものですから、ある組織は、時代の変化とともに閉じなければならなくなります。しかしながら、その組織の歩んだ歴史と積み上げて来た遺産は、形を変えこそすれ、伝統として次の新しい組織に引き継がれるべきものです。今回の記事が、その伝統継承の一助になればという願いを込めて編集しました。時の象徴、時を刻む時計。1948年に関東学院の姉妹校、捜真女学校から寄贈された NIPPON TOKEI 製の時計についての説明記事は、二校の親密さを証しするものです。今回、女子短期大学についてご執筆いただいた元学長の小玉敏子先生は、現在、学校法人捜真女学校の理事長でいらっしゃいます。人は人間関係とその社会の中で成長し、組織も同様に他の組織との関係およびその社会の中で発展します。その意味で、学内外、国内外を問わず、学校間の協力関係を一層深めることが求められているといえるでしょう。歴史は、現在の自己や組織が存在するための土台であり、未来の発展のための踏み台でもあります。そこにも、歴史を大切にすることの意義があると考えます。今後もこの『ニュース・レター』を通して、学院の歴史資料を後世に遺してゆきたいと願っています。関係各位の一層のご支援とご協力を衷心からお願い申し上げます。 学院史資料室長 瀬沼達也

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第4号 発行日 2004(平成16)年4月30日

発行人 関東学院 学院長 松本昌子
編集 関東学院 学院史資料室
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL. 045-786-7049 FAX. 045-786-7862



関東学院 学院史資料室 ニュース・レター

No.4 2004.4

目次

学院史資料室写真集 3	1
関東学院女子短期大学を振り返って	2
関東学院定時制高等学校を振り返って	6
学院史資料の紹介	9
資料・情報提供のお願い	10
編集後記	10



学院史資料室写真集 3 金沢八景キャンパス 1951（昭和26）年頃

1951（昭和26）年頃の金沢八景キャンパスである。ここは旧海軍の施設（航空技術廠工員養成所）だった。第二次世界大戦の終戦の年、1945（昭和20）年5月29日の横浜空襲で京浜急行の黄金町駅付近は大惨劇に見舞われた。三春台の校舎も中学部校舎（コンクリート本館）が焼け残ったものの、戦災を免れなかった。戦災後、その中学部校舎で中学部と工業専門学校^①と捜真女学校^②が三部授業を行った。そして、1945（昭和20）年12月、六浦にあった旧海軍の施設（前出）の使用を許可され、中学部と工業専門学校は移転を始め、翌年1月からこの地で授業を開始した。ウィリアム・アキスリング博士^③やB.L.ヒンチマン宣教師^④の尽力によりアメリカ・バプテスト・ミッションの援助を受け、1951（昭和26）年にこの六浦の地を政府から払い下げることができた。現在この校地は金沢八景キャンパスとして、法人事務局、大学、六浦中学校・高等学校、六浦小学校および六浦幼稚園により使用されている。

① 1944（昭和19）年4月1日に航空工業専門学校が設立され、翌年10月19日、工業専門学校に改組転換した。
② 捜真女学校は戦災によって校舎を全て失ってしまった。なお、関東大震災で大学の施設が失われたとき、捜真女学校の校舎で授業を行った。
③ 1933（昭和8）年6月から1937（昭和12）年2月、および、1949（昭和24）年8月1日から1954（昭和29）年12月16日まで本学理事長。
④ 1951（昭和26）年から1967（昭和42）年まで本学理事、1970（昭和45）年から1988（昭和63）年まで本学監事、1988（昭和63）年10月から1992（平成4）年9月まで本学学院長。

関東学院女子短期大学を振り返って

今年3月で在学生全員が卒業し、女子短期大学は幕を閉じた。『短大三十年記念誌』『関東学院女子教育40年の歩み』『50年の歩み』などで、各時代の詳細が記録されているが、今回は女子短期大学で過ごされた教員、職員、学生であった方々のそれぞれの視点から女子短期大学を振り返り、執筆していただいた。

女子専門学校設置の背景など

女子短期大学名誉教授 小玉 敏子

1946(昭和21)年に女子専門学校(女子短期大学の前身)が設置されるまで、関東学院は男子の学校であった。その関東学院、戦災で校舎の4分の3を失った関東学院に、工業専門学校と経済専門学校のほかに、なぜ女子専門学校を設置しようとしたのであろうか。ひとつには、時代の風潮があったといえる。太平洋戦争が1945(昭和20)年8月15日に終結し、その年の12月4日、〈女子教育刷新要綱〉が閣議決定され、女子大学の創設ならびに大学における男女共学制を実施する方針が定められた。翌年の「米国教育使節団報告書」においても、女子への高等教育の開放が強く勧告された。このような風潮のなかで、女子専門学校の設立がにわかに活発となり、1946(昭和21)年度には22校、1947(昭和22)年度には26校が創設された。

もうひとつは、当時関東学院長であった坂田祐先生が兼務で校長をつとめておられた捜真女学校が戦災で全校舎を焼失し、焼け残った三春台の校舎で授業をしていたことであろう。これより先、関東大震災の折に関東学院の校舎が崩壊したので、捜真女学校で両校が二部授業をした経験がある。

坂田先生が捜真女学校校長兼務を始められたのは、1932(昭和7)年12月であった。その年の秋に、アメリカのミッション本部から、日本の宣教は以後農村に主力を置くため、捜真女学校を廃校にするという方針が捜真の理事会に伝えられた。廃校の報せを聞いた同窓生たちは立ち上がって、母校の存続のために奔走したが、事態の改善の方向が見えないまま、当時の校長が一切の責任を負って辞任した。後任の校長として適当な人が容易に見つからなかったため、やむをえず、坂田先生が兼任されることになった。坂田校長は就任後直ちに、それまであった「専門学校令」による専門学校設立の計画を取り止め、その資金を校舎の修理・改築に当てる決断をされた。

戦災で全校舎を失った捜真女学校に対し、坂田

先生は、関東学院との合併を提案されたが、捜真の同窓生は、合併することによって、捜真女学校という名称が消えてしまうことに対して強く反対した。「捜真」という校名は、“truth-seeking”(真を捜し求める)の訳で、第二代校長ミス・カンヴァースが祈りながら考え、教職員・生徒にも諮って決定し、1892(明治25)年に公表されて以来使われている。実際、1946(昭和21)年2月、財団法人関東学院理事長坂田祐によって文部大臣安倍能成に提出された「専門学校認可申請」には次のような記述がある。

今回ノ女子専門学校ノ新設ハ或ル意味ニ於テハ
捜真女学校旧専門科ノ復活昇格ナルモ
近キ将来ニ於ケル関東、捜真両財団ノ合一、
両校ノ過去ニ於ケル社会的名声ノ大小、
財的基礎強弱等ヨリ考ヘ、関東学院女子専門学校
トシテ関東学院財団ヨリ設立申請ヲナス事ニ決セリ。

関係者たちの血のにじむような努力のおかげで、関東学院女子専門学校(英語科・家政科、修業年限3年)は1946(昭和21)年3月31日付で文部省によって認可された。さっそく生徒募集が行われ、入学試験の結果、英語科77名、家政科60名が合格した。

戦争中の勤労働員のため、十分に勉強できなかった人、家庭の事情などで進学できなかった人など、積極的に勉学の機会を求めて集まった学生たちは、学業にも課外活動にも熱心であった。今日、〈関東学院の名物〉の一つとなっているシェイクスピア英語劇は、1948(昭和23)年、三春台の



第1回シェイクスピア英語劇『ベニスの商人』

焼け跡にあったトタンの囲いだけのある体育館で、光畑愛太教授指導の下に女子専門学校の学生によって上演された『ベニスの商人』が始まりである。女子専門学校の第1期生が3学年になったとき、

女子の高等教育のはじまり

女子短期大学元事務長 上市 二郎

終戦後スマトラから復員した私は母校がどうなっているのか、と学校を訪れたのが、1947(昭和22)年の4月中旬、そして5月から勤務するようになった。その頃は校長室と事務室が別々であったが、女子専門学校設立当時(1946(昭和21)年)は校長の相川高秋先生と事務職員3名が一つの部屋で机を並べて執務していたとのことだった。

小人数で事務全般を処理するのであるがその種類の多いこと。授業の区切り目に鐘を鳴らすこともその一つであった。鐘の上部が握り柄になっていて、“ジャランジャラン”と手振りしながら廊下などを歩き廻ったものだった。他の仕事に夢中になっていると時計の針が所定の数字の上を通過してしまうこともあり、これはなかなか気を使う仕事であった。また、讚美歌、テキストがない時代だったので、毎朝の礼拝(三春台の小講堂で行なわれていた)のために、ガリ版刷のテキストを作って学生に配布したり、讚美する歌詞を移動式の黒板に書き上げておくことも事務局の仕事であった。食糧事情の悪い頃で米粒の入らない朝食をとって学校へ出ると昼食時までお腹がもたなかった。お米の入らない手弁当、小麦粉の入らないパン。教職員も学生もこのような昼食で過ごさねばならない時代だった。先生の中には校庭の片隅に畑を作り、収穫した芋などをやかんで茹でて、これを食べてから英語学校の授業へ向かう姿を見うけることがしばしばあった。このような折、米国からのララ物資、ケア物資の贈り物は恰も宝石のようだった。食糧に、衣類に、受ける教職員、学生の感謝は計り知れないものがあつた。

1949(昭和24)年は短期大学設置申請の準備に追われた年で、教員室を急遽間仕切りをして幾つかの研究室に改修しなければならないし、急造の図書館を地下室に設けることになったり、申請書類においても細かい記載事項が多く大変だった。やがて研究室も型通り出来上ると、先生方の書籍

「中学校高等学校教員無試験検定」の学力試験が行われ、英語科・家政科とも全員合格、教員免許状を授与された。この中には卒業後、公立の新制中学の教員として就職した人たちもいる。



女子専門学校第一回卒業時教職員 1949(昭和24)年

遠藤 憲亮	荒木 甚三郎	安村 三郎	門根 静子	小出 みね
上市 二郎	榎垣 好子	国広 奎子	大塚野百合	角田 静枝
(タッピング夫人)	(エバリン・タッピング)	(のちに小滝)	相川 高秋	(のちに中居)
		時田 信夫	光畑 愛太	松本 久子
			柴 三九男	

○教員				
相川 高秋	学長	教授	英語、英文学	
時田 信夫		〃	英語、英会話、キリスト教倫理学	
柴 三九男		〃	社会、社会学	
光畑 愛太		〃	英語、英文法	
榎垣 好子		〃	被服学、被服構成	
荒木 甚三郎		〃	英語、英語学、英文法	
安村 三郎		〃	英語、英会話	
国広 奎子		助教授	英文学	
大塚野百合		〃	英語	
角田 静枝		講師	調理学、調理実習	
門根 静子		〃	体育	
エバリン・タッピング		宣教師	英会話	
○事務職員				
遠藤 憲亮		書記	法人幹事	
上市 二郎		〃		
松本 久子		〃		
小出 みね		〃		

を自宅より運搬して研究室へ納めるのも事務局の仕事の一つ、そして図書館へも本を入れなければならないのは当然だったが、入れる本が少なすぎて非常に苦慮した。そうして1950（昭和25）年1月中旬、英文科、家政科が認可された。しかし、夜間部英文科は認可されなかったので、英文科夜間特別講座が開かれることになった。これで昼夜共に短大の事務が開始されるのである。1949（昭和24）年に始まったシェイクスピア英語劇は英文科第二部が発足すると男子学生の参加も考えての作品が取り上げられるようになり、夜間の授業が午後8時半に終了し、それから練習。毎夜11時過ぎまで熱心に稽古が続く。この練習が終わるまでが事務局の仕事なのであった。誰かが管理責任上残るのだが、誰が残ろうとも残業手当の支給など一切無い時代で、特にグレセット記念講堂が落成してからはその使用について責任は重かった。

六浦校地への移転は1953（昭和28）年と1954（昭和29）年の2回に亘って行われた。1953（昭和28）年は家政科のみの移転で順調に進んだ。しかし翌年の英文科と英文科第2部が移転する折は生憎、相川高秋先生が米国へ留学中であり、決定権者が不在のところすべてのものを三春台から移転し

なければならないため色々なことで苦労があった。そして1962（昭和37）年4月、短期大学専用の建物がやっとにして出来上った。それも一部が完成したに過ぎないが、それでも専用のものが出来たこと、誰に断ることなく自由に使える建物、諸施設。これまでは点々として移動の連続だったが、やっと得られた我等の城、これを築くための教職員全員の努力は並大抵のものではなかった。

それから時は流れゆき、女子短期大学を母体として人間環境学部へと移り変わった。歴史を振り返りつつ、ますますの発展を祈るものである。

<p>この文章は上市氏から直接伺ったお話と『短大三十年記念誌』（1980（昭和50）年発行）を基にして学院史資料室で纏めました。ご高齢でしかも現役で仕事をしていらっしゃる上市氏は多忙にもかかわらず、この原稿のために幾度か来校してくださいました。また、文中写真の人物名等は上市氏に記憶をたどっていただき判明したものです。この場をお借りしてあらためて御礼申し上げます。</p>	<p>（学院史資料室・菊池）</p>
--	--------------------

関東学院女子短期大学略年表

1946(昭和21)年	4月1日	関東学院女子専門学校を三春台校地に設立(英語科・入学定員100、家政科・50、校長 相川高秋)。
1948(昭和23)年	4月1日	関東学院女子高等学校（英語科・家政科）、同別科（英語実務科・被服速成科）を三春台校地に設立（校長 相川高秋）。
1950(昭和25)年	4月1日	関東学院大学短期大学部を三春台に開設（英文科・入学定員80、家政科・30、部長 相川高秋）。
1951(昭和26)年	3月31日	女子専門学校廃止。
	4月1日	関東学院大学短期大学部英文科第2部を三春台校地に開設（入学定員80、男女共学）。
1952(昭和27)年	3月31日	女子高等学校廃止。
1953(昭和28)年	4月	短期大学部家政科を六浦校地に移転。
1954(昭和29)年	4月	短期大学部英文科（1部、2部）を六浦校地に移転。
1957(昭和32)年	3月22日	短期大学部専攻科（英語専攻）設置認可。
	5月31日	短期大学部を短期大学と名称変更する。
1966(昭和41)年	4月1日	国文科開設（入学定員50）、教職課程（国語）設置。
1967(昭和42)年	4月1日	短期大学を女子短期大学と名称変更する。
1973(昭和48)年	4月1日	幼児教育科を開設（入学定員50）、教職課程（幼稚園）・保育養成課程設置。
1980(昭和55)年	11月26日	短大創立30周年記念式典。
1981(昭和56)年	4月1日	関東学院幼稚園が短大付属幼稚園となる。
1987(昭和62)年	4月1日	経営情報科を開設（入学定員50）。
	4月11日	女子教育40周年記念式典。
1988(昭和63)年	7月30日	栄養士養成課程設置20周年記念の集い。
	10月1日	付属幼稚園開園40周年記念式典。
1992(平成4)年	2月22日	経営情報科開設5周年記念の集い。
1993(平成5)年	6月26日	幼児教育科開設20周年記念の集い。
1994(平成6)年	2月1日	専攻科食物栄養専攻を開設、同時に学位授与機構の認定を受ける。
	3月18日	専攻科食物栄養専攻は3年制の栄養士養成施設として指定を受ける。(本科2年+専攻科1年)
1996(平成8)年	6月1日	女子教育50周年記念式典。
	10月19日	国文科開設30周年記念の集い。
2000(平成12)年	7月22日	理事会で女子短期大学を改組転換し、人間環境学部を設置することが承認可決された。
2004(平成16)年	3月17日	在学生が全員卒業。翌18日の理事会で女子短大の廃止を決定。

関東学院女子短期大学を振り返って

香葉会会長 山口 佳子

時の流れの中で教育の在り方もかえていかなければならないことがあります。

女子専門学校が三春台に創設、関東学院大学六浦に関東学院短期大学と、二部があり、そして名称としては1967（昭和42）年に関東学院女子短期大学となりそして人間環境学部へと移行しました。

女性が教育を受けることが、当然のようになったのは私自身のなかではごく最近という思いがあり、短大が4年制の人間環境学部になることは素晴らしいことと思います。

私自身は、1968（昭和43）年国文科1回卒業生ですが、関東学院の自由な気風を楽しんだ学生生活をおくりました。

関東学院大学の方と同じキャンパスでしたので、クラブは、大学と一緒に活動、大学での講座にも興味のあるものは教室にもぐりこんで聞くことが出



ダンスパーティーでの一場面。(於・横浜プリンスホテル)左は執筆者。

来ましたし、図書館の個室も名前をお借りして学内での空き時間を勉強にいそしむことができました。今から思えばずいぶんとんでもない行為ではありますが、他の学科への興味や多くの知識を持つ必要性を教わり、また一緒に活動していく中では、社会生活で身につけるべきことを知ることも教わりました。

学生運動が激しくなる直前でもあり、学友会恒例のダンスパーティー終了後も主催者を待ち受けている活動家がいるという情報をいただき大学の方に守られながら会場を後にしたこともありました。

国文科の授業は、岡松先生、兵藤先生といった先生方に教わりましたが、授業は他の先生方も皆興味深くなによりも情熱の塊であったことを昨日のように感じています。

この頃の横浜は、元町、ラジオ関東、バンドホテル、クリフサイドと言葉としてあげてもわくわくする雰囲気が町中に溢れていたように思います。

国文科30年を祝うとのことで学校を訪れて以来、卒業生の皆様と接する機会を持てるようになりました。とりわけ「香葉」という冊子の編集のお手伝いにかかわらせて頂き女子専門学校で学んだ方々の戦後の状況や学ぶ意欲を聞いたり、二部の方々のリーダースダイジェストを教科書として学び4年生の大学への進学をしたりという話には旺盛な勉強意欲に驚かされましたし、今も現役で活躍なさるかたのお話は時折涙ぐんでしまうほど感動します。

また、幼児教育科、経営情報科といった私にとって新しい科を出られた方々とも一緒に活動していますが、先輩の話に耳を傾け、自分の意見をきちんともっている素晴らしい方ばかりです。

今、短大という形はわかりましたが、沢山の卒業生が社会のいろいろな場所でいろいろな形ががんばっています。「香葉会」は唯一の“卒業生のかたまり”でありたいと考えています。同じ土壌で育った者同士が相互に支えあってゆく“かたまり”、卒業生同士の情報を共有する“かたまり”、そしてこれからの人生を羽ばたいてゆくよすがのような“かたまり”でありたいと願っています。いつでも短大がその人その人を伸ばす場所であったように「香葉会」も存在していたいと思います。

関東学院定時制高等学校を振り返って

定時制高等学校は昨年3月に閉校した。当時の教頭であった花島光男先生、長年、定時制で教鞭をとり主事をつとめられた葉若英敏先生に執筆していただいた。文中にも記されているが、中学校高等学校の教員が定時制を兼任されていた。その重要なお働きを通しての先生方の言葉は貴重であり、学ぶことが多い。

学院史における定時制の歴史的意義

元定時制高等学校教頭 花島 光男

1953(昭和28)年に始まった関東学院高等学校定時制は2003年3月2日定時制第47回卒業式と閉校式をもって半世紀の歴史を閉じた。関東学院が大学の二部以外に、勤労青年のために夜間の勉学の場を設置したのは、戦前からの英語夜学校、また戦争中の夜間商業工業校を引継ぎ、六浦に設置された定時制の工商高校であった。戦後の新制高等学校開始の頃は働きつつ勉学を望む青年は多かった。学院が私学でありながら取って定時制を開設したのは、院長以下当時の学院指導者が、建学の精神を具現化するための賢明な決断であったと言えよう。学院には戦後の混乱した時代に、他に先駆けて積極的に教育改革を進めてゆく気風が満ちていた。私立中高校でいち早く男女共学に切り換えた事も学院指導者の教育哲学であり見識であった。定時制の開設もその思想の現れと言えよう。

半世紀の定時制運営を可能としたのは、私学でありながら低廉な学費を維持したことで、これは専任教員を置かず、中学高校の専任教員が協力し自主的な奉仕として授業を担当した事であった。しかし、いつの時代も定時制の教員は授業を楽しみながら担当した。

公立においても全日制に併設されている定時制は教頭が実質的な日常運営の要となっている。これは本校でも同様であった。関東学院定時制50年の歴史は、歴代教頭(1988年までは主事)の任期により以下のように前期、中期、後期にほぼ三分して説明される。

前期【若崎(1953-62)、三神(63-68)主事】

開校は社会の要求に応えたもので時期に適い、家庭の経済事情などにより全日制で勉学のできない生徒が多数、夜の教室で真剣に学んだ。拡大発展充実の時代で、1965年度に生徒数は最高になった。市大病院の看護婦さんが多数、厳しい勤務の時間を都合して通学していたことが思い出される。当時の卒業式は全日制と合同で、定時制卒業生代表の言葉は同席する全日制卒業生、その父兄を感

動させた。

中期【海老坪(1969-71)、葉若(72-85)主事】

日本経済の成長と共に高等学校への進学率は急速に高まり、勤労青年は減少した。本校においても生徒数は減少し、最も少ない1975年には75人まで減少した。また入学する生徒に変化が見られた。高等学校への不適応による転入生が増加し、生徒は一律でなく個々に深刻な問題を抱える者が多かった。定時制設立当初の勤労青年のための夜学校の思想には様々な矛盾が生じていた。これらの変化に対応すべく、授業体制について単位制授業の検討を始めたのはこの頃であった。そして、減少傾向にあった生徒数は80年代に入り再び増加の傾向を見せたが、生徒の実態は大きく変化していた。

後期【花島教頭(86-2002)】

生徒の増加傾向はさらに進行した。しかし勤労青年は減少した。ほとんどの生徒は全日制高校への不適応者であった。高等学校に一旦入学し中途退学した生徒、学力や生活指導上の問題で退学した生徒、かつて高等学校教育を受けなかった高齢者、外国学校で学び日本の大学受験資格を認められず転校してきた生徒、身体の障害でどこ的高等学校からも入学を拒否された生徒、ダウン症による知的障害を持ちつつ取って健常者と一緒の高校生活を希望する生徒など、それぞれ特別の事情をもつ生徒ばかりであった。また三春台と六浦の高等学校中退者の受入校でもあった。高校の中途退学者は増加の傾向にあり、定時制はその受入校としての役割りを要求され、その社会的必要性は高まるとともに、教員は難しい問題に対処しなければならなかった。生徒の学力は著しく低下し、生活指導の問題は深刻さを増した。これらの問題に対処する時に、高校教育の本質を議論することがしばしばあった。定時制は向学心をもつ勤労青年の勉学の場ではなくなった。低廉な学費は既にその意味を失っていた。



定時制で使用していた玄関

この頃から公立高校では、定時制を見ると将来の高等学校が見えると言われるようになった。それは神奈川県唯一の私学定時制である本校でも同様であった。生活指導の問題は常に定時制からその現象が現れ、これが定時制閉校の理由にもなったと思われる。教育改革についても定時制はその最先端であった。生徒の実情に合わせた改革は、時間の猶予なく、すぐに取組み解決が迫られた。このような時に文部省より二度に渡り研究指定校となり、『弾力的な教科課程の編成と運営』、『外国語教育の多様化』というテーマで研究報告を作成提出した。これらの研究により、単位制高校を実現、三修制、二期制、無学年選択講座制、英語数学の選択グレード制、半年単位認定、九月卒業、集中授業合宿、特別活動の単位計算、定期試験廃止、中国語授業、四分の三出席条項、必修履修及び修得科目の指定、宗教科6単位の必修修得、授業日

関東学院定時制高等学校を振り返って

元中学校高等学校教諭・定時制主事 葉若 英敏

定時制高校の出発の頃

創立の1953(昭和28)年頃は、戦争の混乱期もようやく落ち着きを取り戻し、多くの青年たちが、都市に職を求めて集まって来ました。しかし、労働のみに過ごす毎日は胸に大きな希望を抱いている若者たちには夢を持つことの出来ない空虚な生活だけが待っていました。

その頃の横浜は戦火の廃墟の中から目覚しい速度で復興しつつあると言えども、街の中心部などの大部分は米国の駐留軍用地として占められ、今の伊勢佐木町通りと大岡川との間には米軍の軽飛行機の飛行場があったり、市内は横浜の大空襲によって破壊されたままの状態で、市民生活に必要な施設や教育機関などは充分ではありませんでした。

関東学院高等学校第二部(定時制課程)は、1953(昭和28)年4月、社会の強い要望に答えて、働きながら学ぶ若者たちのために、全日制高校と同じ建学の精神をもって創立されたのです。そこには、さまざまな経歴の者が集まりましたが、その学業に励む姿は、指導する教師に非常に強烈な感銘を与え、教える教師を支えてくれました。当時は師弟一体の家庭的雰囲気溢れた学校生活であったことを懐かしく思い出します。私は学校出

数の最大確保、研修旅行などが決定実施された。これらの改革は、定時制教員への過重な負担を要求するものであったが、理解と協力を受けることができた。

定時制は激変する高等学校教育の問題の最先端にあって格闘してきたが、定時制を取り囲む環境の変化はそれ以上に早かった。定時制が先行して決定採用したこれらの改革のいくつかは、いま全日制で導入を検討している。

定時制についての記録、記事は以下の図書、掲載記事を参照ください。

- 『窓の灯』定時制創立40周年記念誌 1993.10
- 『窓の灯』定時制閉校記念誌 2003.3
- 同窓会紙『橄欖』22号、23号、24号
さようなら定時制特集1.2.3.
- 『いんまぬえる』79号

たての新米教師でしたが、年齢もさほど変わらぬ生徒たちにずいぶんと手助けを受けたことを思い出します。クラスに初老の御夫人がおりました。ある時チョットしたきっかけでお歳をお聞きしたら私の母と同じ歳であったことに驚きを覚えたこともあります。また、生徒たちの中には、さまざまな生活体験をした者が多かったことも特異な状況でした。第二次世界戦争にかり出され学業半ばの者、困難な経済事情によって止むを得ず働きながら学ぶ者、遠隔の地方から職を求めてやって来ている者、准看護学校を経て横浜市大医学部付属病院に働く者、保土ヶ谷の自衛隊駐屯地の隊員が上官と一緒に通い学ぶ者たち、小さな私企業の社長さんが若い社員を連れて一緒に学んだりしていました。勉学のみならず、当時御健在だった坂田祐院長の礼拝の話に耳を傾け、眼に涙していた生徒の姿を思い、当時、駆け出しの教師だった私は、真の教育とはかくあるべきものであることを教えられました。

家庭的雰囲気は日常の学校生活にも溢れ、球技大会や研修旅行の時には、准看護婦の生徒が救護係をかってでたり、新年最初の始業式には家具製造業の生徒の手造りの羽子板で羽突き大会をしたり、中庭で餅つき会をしたり、小倉百人一首のかるた会を体育館でしたりしたことも忘れ難い二部での良き思い出の一つです。

学院史資料の紹介

学院宗教主任・経済学部教授 高野 進

『素描（神学博士）アルバート アーノルド ベンネット
その生涯と人物』

編著 ベンネット夫人
訳 多田 貞三

この書は、1985年に関東学院百周年にあたり、翻訳・出版されたものである。もともとの英文タイトルは、A SKETCH OF THE LIFE AND CHARACTER OF ALBERT ARNOLD BENNETT D. D. である。出版年は、博士の逝去後、4年目の1913年、出版地はアメリカ・ロードアイランド州プロヴィデンス市である。編著者は BY HIS WIFE とある。夫人も、ベンネット博士と同じく、ご自分を売り込まない謙虚なお人柄であったことが、この表現からもわかるであろう。夫人の略歴と葬儀の様子については、この訳書に付録として掲載してある。地元の新聞に出た記事をそのまま訳出したものであると、翻訳者の多田先生はことわっている。アメリカでは、広い国土がそうさせたのであるが、一般の人は全国紙よりも、ローカル紙をよく読む。そのためローカル紙が発達している。一般市民の冠婚葬祭までが記事となる。このような「死者略伝」(obituary) がしばしば掲載されている。実は、これが後の時代の研究者にとっては貴重な史料となる。

夫人の旧姓はメラ・イザベラ・バロースである。夫人は博士と共に1879年来日、博士が逝去した1909年まで、日本に30年在住された。帰国後、ただちに博士のこの「思い出」をまとめたのであろう。私費出版である。

夫人は音楽を専門としていた。バプテスト神学校、捜真女学校、共立女子学園で音楽を教えていた。現在の讃美歌にもベンネット博士作詞、夫人作曲のものが残っている(48番)。今で言うところの「癒し系」の静かな曲である。この讃美歌からご夫妻のかもしだす雰囲気や推測することができる。タイトルの下にこういう題辞が掲載されている。

For many years regarded as
"the Nestor of Baptist Missionaries in Japan."

多田先生はこれをこう訳出している。「長年の間『日本におけるバプテスト宣教師の Nestor（賢明な老顧問）』として尊敬された。」遠慮がちな夫人が、ここでは、亡き博士に対して、最大の賛辞を掲げている。ところで Nestor とは、ギリシア神話の『イリアッド』に出てくる賢王のことである。転じて「賢明な老人」を意味している。多田先生は「賢明な老顧問」と訳しておられる。かつては、先駆者ネイサン・ブラウン博士がそう呼ばれていた。そしてその後継者であったベンネット博士も、もうそのように呼ばれるようになっていたのである。学識においても、人格においても、十分にその名に値した人であったからである。

扉の後ろには、横浜山手外人墓地にある博士の墓碑について、こう記してある。

IN MEMORY OF
ALBERT ARNOLD BENNETT
AMERICAN BAPTIST MISSIONARY
Born in Philadelphia, April 16, 1849
Died in Yokohama, October 12, 1909
HE LIVED TO SERVE



この最後の墓碑文を多田先生は「彼は仕えるために生きた」と訳した。夫人はこの碑文についてこう注記している。「これは、彼の稀に見る美しい生涯を最もよく要約した言葉である、と誰もが感じるところである。」

夫人は本書のタイトルとして LIFE AND CHARACTER という表現を用いられた。一般にある人についての最終的評価基準は、その人が「いかに生きたか」であり、その人の「人格性」にかかわる。人は一生かけて人格性を磨きあげる課題をもつ。そして一生をかけて、その人格性を発現・展開する課題を持つ。これは教育と宗教の課題でもある。タイトルの含蓄も、博士の人格と生き方が切り離せないことを、すぐれた短い言葉で示している。博士の生涯・生活そのものが奉仕であった。それが博士の人格そのものであったので、多くの人々から敬愛されたのである。実際、博士が学生を愛して、熱意をもって教育にあたったばかりではなく、地域の人たちに心から奉仕し、さらには東北三陸地方の津波の被害救済のためにも出かけていった。

本書の第一部では、博士の幼少年期から死まで、博士の活動などが紹介されている。続いて友人たちから寄せられた博士を偲ぶ言葉が掲載されている。第二部では、博士が残した讃美歌と詩、召される年に招かれた宣教師大会において行った説教が掲載されている。

翻訳を担当された多田貞三先生は、戦前の関東学院中学部と戦後の関東学院大学で英語を教え、「英語の関東学院」の名声を高めた英語教育のヴェテランである。先生については『関東学院学報』第27号に評伝が掲載されている。ご覧いただきたい。多田先生は、このお仕事をなんと96歳でなしとげられた。しかも訳文は格調高いものであり、それでいて読みやすいものである。多田先生は博士の教えるバプテスト神学校で学ぶつもりで、その予科にあたる東京学院に入学した。しかしその年に博士が天に召されてしまった。そのため博士から直接教えを受けていない。お目にかかったことはあると言う。博士を知る最後の人であった。その点で、最適な人が翻訳にあたったわけである。博士への篤い敬慕がこれを完成させた。先生は翻訳完成後、このようにその感慨をご自身の著作の中に記しておられる。

「私は夫人の遺著『アルバート アーノルド ベンネットーその生涯と人物』の翻訳を頼まれ、お陰様で、ベンネット博士の直弟子となれたような光栄を感じることができました。」

最後に、拙著『A. A. ベンネット研究』は、この訳書が出てから十年後に出版されたものである。これは夫人のまとめたものを補完する役割をもつので、紹介しておきたい。拙著の方は、短い博士の評伝、それに続いて博士が書き残した N. ブラウン伝、説教学、讃美歌、書簡などを翻訳し、注記・分析・解説を加えている。さらに付論として、博士が始めたところの、日本におけるアメリカ・バプテストの神学教育と男子教育の変遷について記している。これもベンネット博士研究の一助となるであろう。

昼間働き夜学ぶ生徒たちにとって、二部での生活はただ勉強だけの繋がりだけではなく心と心の深い交わりの時を持つ機会でもありました。午後9時30分の終鈴がなると、京急黄金町駅改札口の脇にあった喫茶店でお茶を飲みながら勉強の理解出来なかった個所を教えあったり、誰にも話せなかったことを話し合ったり、閉店10時30分までの短い時間を楽しみ味わっていました。

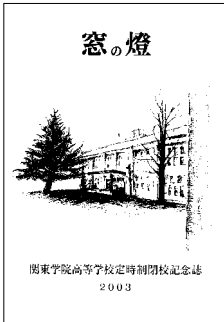
変化しつつある定時制高校の現状

1953（昭和28）年の二部発足当時から、20余年の歳月が経ち、時代の流れと共に定時制高校の生徒たちの気質も当初より大分変わって来ました。中学生のほとんどの者（90%以上）は全日制高校に進学するのが現状となり、定時制高校に進学する生徒は年々減少し、結果、公私立を問わず定時制高校が統廃合になりその数は少なくなりましたが、二部のもつ教育の理念と精神は伝統あるキリスト教主義学校として、常に聖書の御言葉と祈りを土台として、「人になれ、奉仕せよ」の建学の精神をもって、独特の暖かい雰囲気を保ちながら歩んでおりました。

しかし、数こそ少ないが底辺で泥まみれになって働きながら、真理の道を真剣に求めている次代の日本を背負う若者がいる事を知っている我々教育の現場に携わる者は、眼を背けたり、素知らぬ顔をしてはいけないのです。日本の経済成長やその発展は、彼等がその底辺で真剣に働いている事によって、支えられているのです。私たちは生徒たちが学習し易いように、単位制による学習習得方法の導入も考えてみました。

定時制の生徒には、全日制の生徒のように受験勉強に追い回され、心の目標を見失いがちであったり、打ちひしがれた子羊のような無気力な姿はありません。自由に明るく生き生きとした生活に満ち溢れていま

す。しかし、全く負い目を背負っていないのではありません。全日制の高校生のように十分な学習時間に恵まれず、自由にクラブ活動を通し



定時制閉校記念誌の表紙

てエネルギーを発散する時間も場所もお金もありません。大勢の友達や経済にも恵まれていません。しかし、今の時を大切に生きようとする心構えは彼らの眼を輝かせていました。そして、どんな苦勞をしてでも高校生としての最小限の学問を身につけたいと願う若者たちなのです。大部分はそのような生徒が多かったと言うことです。

残念な事ですが、わが関東学院定時制高等学校は昨年の3月2日に50年の歴史にその幕を閉じました。

終わりに

定時制教育に携わった経験を通して思う事は、多くの勤労学生を育て社会の為に眼に見えない業を示すことは、その社会にとって、大きな掛け替えのない利益であると思います。また、科学・文化を表徴する国の誇りでもあるとも考えます。社会は若人の教育のために、多くの援助を惜しんではならないのです。

今の定時制高校には、その1／3が学力不足によるため全日制に進学出来なかった者、全日制高校で単位を修得できず止むをえず夜間に通う者、精神的重荷を負って全日制高校の生活が出来ずにいる若者たちです。他に、家庭の事情で家族の生活を支えるため、働き、その乏しい生活費の中から学費を割いて学業を続ける者の割合が多いのです。また、社会人として生活をしてきたが、高校教育を収めたく学校生活を続ける者がいたり、遠い故郷の肉親と離れて働きながら学業を志す者もおります。都会の中の学校には多種多様な事情を持った子供たちが集まって来ます。彼らに接し、我々は彼らに何を与えることが出来るのか、真剣に考えさせられました。私たちはキリスト教の教えをその土台としてその教育の業を進めて来られたことを誇りに思い、彼らと共に考え、悩み、ともに話し合うことが出来たことを神に感謝しています。

関東学院定時制高等学校略年表

1953(昭和28)年	3月14日	神奈川県知事より定時制課程設置認可される。
	4月23日	第1回入学式(34名)。
1957(昭和32)年	3月1日	第1回卒業式(32名)。
1962(昭和37)年	11月1日	創立10周年記念式典を挙(於 小講堂)。
1968(昭和43)年	4月13日	創立15周年記念式典を挙。
1973(昭和48)年	1月27日	創立20周年記念式典を挙。
1990(平成2)年	4月	3年制2期制の開始。3年制最初の生徒入学。
1993(平成5)年	11月	創立40周年記念式典を挙。
2003(平成15)年	3月2日	第47回定時制卒業式。
	3月2日	高等学校定時制閉校式および閉校記念会。